

## 説教のポイント

とりなす者はいるか

イザヤ五九・一四〜二〇

マタイ一三・五三〜五八

「とりなす」という言葉は普段あまり使わないかもしれませんが。なかだちや仲介、対立する二者の間に立って事態がうまくいくようにとりはからう、という意味です。聖書にはこうした考え方がよくでてきます。とくに神と人間の間で。

昔、ソドムの人々の罪があまりに重く、このままでは滅ぼされると思ったアブラハムは神に申し出ました。「この町に正しい人がまだ五〇人残っていたとしても、主よ、あなたはこの町すべてを滅ぼされるのですか」（創世記一八・一六）

すると神は言われる。「もしソドムの町に正しい者が五〇人いたら、その者たちのために町全部を赦そう」。五〇人がとりなす者となる、と。この赦しの約束を聞いて、むしろ不安になったのは

アブラハム。「主よ、もしかしたら五〇人に五人足りないかもしれません。それでもあなたは滅ぼされますか」。神は「もし四五人いれば滅ぼさない」。不安はそれでは治まらない。「四〇人」「三〇人」「二〇人」と数を減らし、最後「一〇人だったら?」。神は「もし一〇人いれば滅ぼさない」。質問はここで終わります。が、読者の想像は続く。八人、五人、三人、いや一人だったら? 今日、イザヤ書に「主は人ひとり、とりなす者がいないのを見て驚かれた」とある。これが包み隠さぬ現実の姿かもしれない。そこまですで人間の罪が大きければやはり滅ぼされる? しかし、主の答えは違いました。「主は贖う者としてシオンに來られる」（二〇節）。

主自ら「とりなす者」となってくたさる。そこまで私たちを愛して下さっている、と。この約束を主は守られ二〇〇〇年前のクリスマス、イエスは誕生されました。とりなす者として。